

聖書：コリント人への手紙第一 6：12～20

説教題：からだをもって神の栄光を

日時：2022年5月22日（朝拝）

コリント教会の問題の二つ目として、5章1節から彼らの間にあった淫らな行いについてパウロは語っていますが、今日はこのテーマのまとめとなる部分です。5章1節に「父の妻を妻にしている」人がいると言われましたが、問題はそれだけではなかったようです。前回見た6章9節に「姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者」という言葉も出て来ました。そして今日の箇所にはさらなる具体例が出て来ます。コリント人たちにはこのような行いを正当化する言い分、スローガンがあったようです。パウロはまずそれを今日の箇所の12～13節で取り上げます。

一つ目は12節にある「すべてのことが私には許されている」という言葉です。これは12節で2回繰り返されています。またこの手紙の10章23節にも出て来ます。彼らの間でよく言われていた言葉だったのだらうと思われます。さてこれはどういう意味でしょうか。一言で言えば、これはいわゆる「キリスト者の自由」という教理の誤用あるいは悪用であったと言えます。聖書は救いはただ恵みによると教えます。行いにはよりません。キリストを信じ、救われた信者は律法の責めから解放されています。律法に囲まれ、律法から訴えられることはありません。これを彼らは都合良く解釈して、「信者は今は何をしても問題ない。すべてが許されている」と言って淫らな行いも正当化していたのでしょう。しかしキリスト者の自由とはクリスチャンは何でも好き放題のことをしても構わないという意味ではもちろんありません。パウロはここで一緒に考え合わせるべき2つのことを述べます。一つは「すべてが益になるわけではありません。」特に考えられているのは他者の益、教会の益です。私は自由だと言って好き勝手な振る舞いをし、その結果、他人に迷惑をかけたたり躓かせたりするようでは話になりません。それは他の人に益をもたらすか、教会の徳を高めるか。そういう観点から考えて良い道を選び取るのが真の自由です。もう一つパウロは「私はどんなことにも支配されはしません」と言います。自由だ！自由だ！と言いながら色々なことをして実は奴隷状態になっているということはありません。不道徳なことを自由だ！と思ってやっているかもしれませんが、実際は罪の奴隷、欲望の奴隷となっている。これは福音が与える自由に生きているということではありません。

もう一つコリント人の中で言い交されていたキャッチフレーズが13節にあります。それは「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」というものです。これはどういう意味でしょう。コリント人たちが言いたいのは次のことです。食物と腹の間には自然的な関係があるように、からだと淫らな行いの間にも自然的な関係がある。腹は食物を必要とするように、からだはいわば遊女を必要としている。これは人間にとって自然なことであり、責めるに値しないという主張です。このような理屈で彼らは性的欲求を不道德な方法でも満たすことを肯定していました。しかしパウロはこの考えには大きな誤りがあることを示して行きます。

13節に「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と記された後、「神は、そのどちらも滅ぼされます」と続きます。少し細かいですが、実はここまでがコリント人たちのスローガンであった可能性があります。彼らの考えとは、肉体に関することはこの世限りであるというものです。腹も食物もいずれ滅ぼされる。そこに永遠的な意味はない。彼らは救いを魂との関係でのみ考え、肉体に関することはやがてすべて捨てられるだけであって、それを地上にいる間どう使おうと救いに影響しないと考えていました。その線に沿って、肉体を淫らな行いに用いても問題はないと考えていたということです。あるいは新改訳のように、ここをパウロの言葉と考えることも可能です。その場合、確かに食物と腹（胃）は永遠に残るものではないとパウロが言っていることになります。それらはこの世限りのものです。確かにこの世で私たちが食物を摂取し、胃で消化するのは、そうしないと生きて行けないからです。しかし聖書によると、やがて私たちが天国でいただくからだは強いからだです。食べ物を定期的に摂らないと病気になるような弱いからだではありません。やがて天国でいのちの木から取って食べるとも言われていますので、食べるという行為そのものはあるように思われますが、今の私たちの胃と食物の関係はこの世限りのことであるとパウロは言っていることになります。この部分がコリント人のスローガンであれ、パウロの言葉であれ、重要なのはこの節後半の方ですので大きな問題はありません。

パウロが言いたいことは13節後半にある通り、私たちのからだはやがて滅ぼされる運命にある腹や食物とは異なり、主のためにあり、また主はからだのためにあるということです。この言葉は次の14節と一緒に考えると、その意味が見えて来ます。14節：「神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。」　まずはっきり分かることは私たちのからだは永遠に属するもの

であるということです！コリント人たちが考えていたように、私たちはこのからだをこの世限りのものとして軽蔑してはならないのです。神はイエス様をよみがえらせました。単に霊だけを復活させたわけではありません。からだをよみがえらせました。つまり、いかに聖書はからだを重要と考えているかということです。そしてからだをもって復活したイエス様に結ばれて私たちもからだをもってよみがえる者とされます。ここでからだの復活を指して「私たち」がよみがえらされると言われています。これはいかに私たちのからだは私たちの人格そのものと深い結びつきがあるものとして考えられているかを示しています。「からだ」と「私たち」は切り離せない関係にあるのです。

そして私たちのからだは「主のため」にあると言われています。私たちのからだが生けるものとされるのは主の十字架と復活を通してです。ですから私たちのからだは向き合うべきは淫らな行いではなく、主です。私たちのからだは主のためにあります。その後にある「主はからだのためにおられる」という表現は、主こそ私たちのからだを支えてくださる方であるということを行っているものでしょう。ここに私たちは自分のからだに関する聖書のメッセージを知らなければなりません。私たちのからだとは、地上で過ごす間、一時的にまとい、後は用が済んだら捨て去るものではないのです。私たちのからだは永遠に残るものです。キリスト教が語る救いのメッセージの特徴はこのからだの救いです。そしてこのからだは主との関係によって永遠に生きるものとなるのであり、このからだは主のためのものなのです。

このことに基づいてパウロは 15 節で言います。「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。」 教会はキリストのからだであり、私たちはそのからだの部分であるというメッセージについては、私たちは聖書から教えられ、良く知っていると思います。しかし私たちはこのキリストとの結合関係を単に霊的な側面にだけ限定して考えるはなりません。私たちはからだも含めた全存在がキリストに結ばれて救われるのですから、私たちがキリストの部分であると言う時、私たちのからだもキリストの部分を構成していることになります。もう一度申し上げますが、私たちのこのからだもキリストの一部であるということです。とするなら、そういうクリスチャンが遊女と交わることは恐ろしいことを意味します。それはキリストのからだの一部をもぎ取って遊女のからだの一部とすることである！とパウロは言います。ある人は遊女と交わることはそんな大それた意味を持たな

いと言うかもしれません。単なる遊びであると。しかしパウロは 16 節でこう言います。「それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。『ふたりは一体となる』と言われているからです。」これは創世記 2 章の結婚の制定に関する聖書の御言葉を指すものです。その創世記 2 章に、性的な結合を指して「二人は一体となる」と言われています。その行為は二人が一人になることを表します。両者が一つ肉となるのです。とするなら信者が遊女と交わることは、キリストのからだの一部分をもぎ取って遊女のからだの一部とすることです。こんな冒瀆的なことがあってはなりません！とパウロは言います。私たちは自分のこのからだはすでにキリストの一部とされているのだということを良く知らなければなりません。心がキリストに取り分けられているだけでなく、このからだもキリストのものであります。キリストの一部です。そういう自分のからだの使い方には注意を要します。ましてや遊女のからだと結び付けて、それと一つの肉としてしまうような恐ろしいことをしてはならないのです。17 節に信者は主と一つ霊であると言われています。クリスチャンは聖霊によってキリストと一つに結び合わされています。聖霊によってキリストと結ばれている私たちはからだもキリストに結ばれていることを覚えなくてはなりません。そのからだを主のからだの一部として、主のものとして用いるようにしなければなりません。

最後 18 節以降でパウロは消極的面と積極的面の両方から勧めをします。まず 18 節は消極的面から「淫らな行いを避けなさい」と言われます。これは現在形の表現ですので、そうし続けなさい、いつも避け続けなさいという意味です。その後続く言葉が少し難解です。「人が犯す罪はすべて、からだの外のものであります。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。」罪はどんな罪も罪であることに変わりありませんが、ここで言われているのは性的な罪の特別さについてでしょう。性における満足は、いわばからだ全体を総動員し、人格のすべてをそこに注ぎ込んで得るものです。これまで見て来ました通り、「からだの神聖さ」を心に留めるなら、性的な不道徳は、そのようなからだ全体を用いての、からだ全体に対する特別な罪であるということが分かって来ます。それは神の前に特別な価値を持つ尊いからだを御心に反することのために用いて汚すことであり、それは自分自身に向かって自分自身を破壊するような行為であるということです。そのことを思って、避けなさい！と言われています。

そして 19 節では再び「あなたがたは知らないのですか」と言われて、肯定的面からの勧めがなされます。まずあなたがたのからだは聖霊の宮であると言われます。神が遣わしてくださった聖霊が住んでいてくださる神聖な場所です。私たちは聖霊が自分のからだの内に住んでいてくださることを感謝して、この聖霊を悲しませることがないように、むしろこの方によって聖い歩みへ進むようにと導かれています。また「あなたがたはもはや自分自身のものではありません」とも言われています。20 節には「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです」と言われています。言うまでもなく、イエス様が十字架上で払ってくださった尊い代価のことです。こうして私のからは、私が好きなように使って良いものではなくなっています。今や私は、このからだも含めて主のものであります。13 節で見たように、私たちのからだは主のためのものです。ですから 20 節最後にこう言われています。「ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」 大切な点は「からだをもって」という部分です。心だけではありません。具体的な私たちのからだをもって神の栄光を現しなさいと言われています。私という人格の具体的な表現手段であるからだを用いて神の栄光を現しなさいと言われています。

私たちはこれまで自分のからだについてどう考えていたでしょう。もしかするとコリント人の考え方に似ていたということはないでしょうか。霊的な救いを強調するあまり、肉体的なことを切り離し、軽んじていたことはないでしょうか。そしてこのからは天に行くまで制御不能のものであり、地上にある間は汚れにさらしていても仕方がない。むしろそれは自然的なこと、必然的なことと考えていたことはないでしょうか。しかし私たちのからだをそのように二元論的に考えてはならないと聖書は語ります。霊ばかりではなく、からだを含めた全部が救われるというのが聖書のメッセージです。ですから私たちは今の私たちのからだを低く見てはならないのです。私たちのこのからは救われるからだです。私という人格の救いになくってはならないものです。やがて私たちは天国で完全に聖められた魂とともに、完全に聖められたからだを持つ者とされます。そこにつながるものとして今の私たちのからだがあります。そのことをわきまえて、私たちのからだの使い方を神の言葉の光の下で導かれないと思いません。すでにキリストに信頼し、キリストに結ばれている私たちのからはキリストの部分とされています。また私たちのからは聖霊が住んでいる宮です。私たちは大きな代価を払って買い取られた者たちです。このことを感謝して、心だけではなく、私たちのからだを神の栄光のためにささげ、用いていただく者でありたいと思えます。

これはもはや自分自身のものではないこと、主のためのものであることを覚えて、そのように主におささげし、ついに最後の栄光の復活の日、このからだの完全な救いの日へと至る真に幸いな道・救いの道を歩む者とされて行きたいと思います。